

二階の窓から裏庭を見下ろしたとき、
ふじうづぎの紫色の花房に黒い蝶がと
まっているのを見て、また来ていると
思ってから、あらためて目をこらした。
いつも来る蝶とは違う。
ゆったり開閉する黒いビロード様の大

昆虫図譜

kasahara jun

笠原 淳

昆虫図譜



笠原淳



福武書店



昆虫図譜

一九八四年四月一〇日第一刷印刷
一九八四年四月一五日第一刷発行

定価 一〇〇円

著者 笠原 淳

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二丁目二八
番一〇三 電話(〇三)二三〇一三三
三三 横替口座(東京)六・一〇五〇九七

印刷・製本 大日本印刷

(落・乱丁本はお取替先致します)

笠原 淳(かさはら・じゅん)
一九三六年、神奈川県に生まれる。
法政大学経済学部中退。シナリオ研
究所、NHK脚本研究会を経て、N
HKでラジオドラマ創作、脚色等。
その間ドラマ作品「走れドン」にて
第一六回芸術祭奨励賞受賞。その後
「漂泊の門出」で第二二回小説現代
新人賞受賞。「ウォークライ」で第
八回新潮新人賞受賞。「空二の世界」
で第九〇回芥川賞受賞。著書に「空
二の世界」「夕日に赤い軌」などが
ある。

昆虫図譜——目次

昆虫図譜

9

家の精

61

古井戸

113

堰の蛇

145

ガラスの夢

187

裝丁菊地信義

昆蟲圖譜

昆虫図譜

二階の窓から裏庭を見下ろしたとき、ふじうつぎの紫色の花房に黒い蝶がとまっているのを見て、また来ていると思つてから、あらためて目をこらした。

いつも来る蝶とは違う。

ゆつたり開閉する黒いビロード様の大ぶりの翅の縁に、青緑の筋が光る。エメラルド色とも瑠璃色ともセルリアンブルーとも形容し難い。陽光の加減でプリズムを透したように微妙に色が変容する。

——ミヤマカラスだ。

息をつめて、蝶のゆるやかに開閉する翅の紋様に見入った。ミヤマカラスアゲハを見かけるなんて、何十年ぶりのことだろう。

中学生の頃だったか、同じ丘陵地帯にある私立学園の構内で時折見かけたことがあった。丘の頂の雑木に囲まれた講堂の裏手に、ふじうつぎのかなり大きな株があって、肌の汗ばむ初夏になると、枝先に紫色の花房がたれる。ブドレアともいう。丈一メートルから二メートル前後の、なりは風趣のない落葉樹で、有毒でもあるというが、その花には格別の旨味があるのだろうか、種類の昆虫類があつまってくる。それらの中に、美しい紋様の大ぶりの黒蝶をみかけた。学校の理科室に備えてある昆虫図鑑で、ミヤマカラスアゲハという名を知った。たいてい雌雄番いで、多くても二番いほどしか見なかった。北海道、本州、九州の山地に棲息するということで、蒐集家の珍重するほどのものではないのだろうか、この辺りではなかなか見ることがない。

ふじうつぎの花房にとまった蝶は一心に蜜を吸っていて、すぐにははなれそうもなかった。間近に寄ってその紋様をたしかめたいと思った。間違いないと思いつながら、昼日中幻を見ているような心もとなさがあった。うわずる気持を抑えながら、足音を忍ばせて階下に行くと、勝手口からサンダルをつっかけて表に出た。手近に捕虫網かそれに代る道具のないのを残念に思いながら、裏庭にまわった。二階の窓をはなれてからもの一分と経っていない。が、ふじうつぎのもとに近付いたときには、ミヤマカラスアゲハは影もなかった。あわてて周辺を見まわしたが、羽虫一匹見当らなかつた。

未練を残してなお庭の内外を眺めながら、二階の窓から見た光景を反芻した。あれはたしかに

ミヤマカラスだった、と自分のイメージを白い画布に描くように思った。

母屋の縁先で野太い笑い声がした。昨日から敷地内にあるアパートの修繕に来ている大工の石川が、母と妻の珠江を相手に茶を飲んでいる。

庭にまわっていくと、石川が人なつっこく目を細めて会釈した。三十半ばの年で、地下足袋に印半纏も身についたいっぱしの棟梁ぶりだが、どこか稚げに見える。幼年時の彼を知っているせいかもしれない。

珠江がこちらの足もとに眼をやって妙な顔をした。見ると、サンダルを自分のと珠江のと片方ずつとり違えてはいている。

「今、裏にな……」

ミヤマカラスアゲハが来ていた、と説明したが、みな分ったような分らないような顔をしている。

「カラス、ですか？」

「蝶だよ。この辺りじゃ滅多に見かけなくなつたんだがね」

ミヤマカラスアゲハの翅の紋様などを説明すると、石川がたいして興味もない面持で、「姉貴の亭主に話したら、すつとんでくるんじゃないかな」

と言った。石川の義兄の香取は市内でタイプ印刷業を営んでいる。

「このところ会わないが、元気にやってるかい？」

「相変らずですよ。ロクに仕事もしないで蝶だの虫だの追っかけまわしてるわ」

奥の四畳半で臥床している父の呼ぶ掠れ声がして、母が様子を見に立った。珠江も一緒に腰を上げて風呂場に行った。洗濯機のブザーが鳴っている。

「冬子さんは、どうしてる？」

話のついでのようにさりげなく訊くと、石川は短くなった煙草を足もとにおとして踏み消しながら、

「姉貴もね、どういうつもりなんだか、好き勝手なことをやってるみたいだね。ちっとは先のことを考えたらどうだって言ってるんですがね」

「しかし、彼女はまともに働いてるじゃないか」

冬子は小型のライトバンを運転して小荷物の委託配送をしている。

「いや、働くことは働いてますがね。どうもやる方がいい加減なんだな。いきあたりばったりっていうか……おれには分るんですよ。ちゃんとやってるように見えるても、どこか投げやりだっ
てことがね。気が入ってないっていうかね。あれは、何だな、子供がいなくてのもよくないんだな」

「うちもそうだがね」

「そういえばそうでしたっけね」

石川は薄笑いを浮かべて、別に恐縮した様子もない。しかし、考えてみると石川が冬子の生活態度について言ったことはそのまま自分にも当てはまるようである。どこか氣が入っていない。働き盛りの大工の棟梁の目には理屈抜きにそういう氣配が見てとれるのかもしれない。石川もたいした仕事をしているわけではなさそうだが、指の先まで鋭利な大工道具と化しているような彼に対しては、自分は鮑屑の如きものでしかないように思われる。少なくとも石川の目にはそのように映っているに違いないと思われる。

石川とは、幼年の頃の彼を知っているとはいふものの、再会したのはつい先頃のことである。母屋の父の寢所を改造する必要があつて、知り合いの不動産業者に適当な大工の斡旋を頼んでおいたところ、やつて来たのが石川である。親の代から地元にいる大工ということと、その名前がすぐに結びついて、ひょっとしたらと思つた。がっしりした体軀に陽灼けした精悍な顔つきの本人を前にしたとき、すぐにそうとは分らなかつたが、何かの拍子に意味もなく上目づかいに笑つてみせる表情を見て、往時の鼻たれ小僧の面影がよみがえつた。

「おたくは、たしか、学園の体育館の裏に住んでいた……？」

念のために質してみると、石川は訝しげにこちらを見直して、

「たしかに石川の件だけだ」

と頷いた。一緒に遊んだことがあると説明すると、石川はちょっと当惑な薄笑いを浮かべたが、当時三、四歳だったはずの彼にはその時分の記憶はないようだった。

「姉さんがいたね。その頃十二、三だったかな。何ていったっけかな」

「冬子……？」

「そう、冬ちゃんっていった」

石川はにわかには初対面の緊張がほぐれた様子で、家族のその後の消息を話し始めた。両親はすでになく、弟妹がいるが、話は主に姉の冬子のことになった。

一度結婚したがしくじって、今は再婚して市内に住んでいる、と言ってから、姉貴は男運が悪くて、と妙に年寄りみたくぶりで嘆じた。愛敬はあるが口の軽い男である。

髭の剃りあとの青々とした石川の顔つきを前にしているうちに、幼時の彼のしぐさを思いおこして、ふっと可笑しくなった。七つか八つも年上の姉にまつわりついて、まわらぬ舌で、チンモロケミセロ、としつこく繰り返かえしていた悪たれが、その姉の男運の悪さをもっともらしい思い入れて嘆いている。それと同時に、すっかり忘れていた冬子の面影が淡い輪郭のまま脳裡に揺曳して、少年時に初めて性感を自覚したときのようなもどかしい疼きを覚えた。

冬子の再婚相手がタイプ印刷業を営んでいると聞いて、年賀葉書の印刷を頼む気になった。同